

ンに包埋し、Avidin-Biotin-Complex methodを用いて、抗ET-1(-2)抗体および抗ET-3抗体による免疫組織化学的染色を行った。ET含有細胞の同定は、他の下垂体ホルモンに対する抗体を用いて、連続切片での染色および二重染色により行った。〔結果〕7例中4例の下垂体前葉組織において、卵形、大型細胞に、ET-3免疫染色を認めた。本細胞は連続切片および二重染色によりgonadotrophと同定し得た。一方、ET-1(-2)免疫染色は認められなかった。〔結論〕ヒト下垂体前葉gonadotrophにET-3免疫染色を認め、下垂体前葉ホルモン分泌調節におけるET-3のパラクリン作用が示唆された。

4. 腎レニン mRNA に関する in situ hybridization 法を用いた検討

(第2内科, 腎センター泌尿器科*, 第2病理**)

成瀬 清子・成瀬 光栄・門前千香子・
吉原 泉・庭山 素子・西川 俊郎**・
田辺 晶子・東間 紘*・出村 博

〔目的〕非放射性標識オリゴヌクレオチドプローブを用いたレニン mRNA の in situ hybridization 法により、各種腎疾患における腎レニンの動態を検討する。〔方法〕腎細胞癌(RCC)腫瘍部3例、RCC非腫瘍部腎組織8例(うちCRF合併1例、塞栓合併1例)、嚢胞腎1例、慢性腎不全等の剖検腎組織を用いた。組織はPFAにて固定後、凍結切片を作製、既報の免疫組織化学的 in situ hybridization により染色した。〔結果〕RCC 3例中2例でレニン mRNA の染色を認め、一方、RCC非腫瘍部腎組織6例では、mRNA 陽性JG装置数、JG細胞数は極めて少なく、レニン合成の抑制が示唆された。CRFまたは塞栓例では、mRNA 陽性細胞は増加していた。嚢胞腎では、残存腎実質にレニン mRNA の染色を認め、剖検例でも、レニン mRNA は染色し得た。〔結論〕腎レニン分泌はレニン遺伝子の転写レベルでも調節されていることが示唆された。

5. ヒト内分泌腺における insulin-like growth factor I の免疫組織学的検討

(第1病理) 付 強・金田 良夫・
豊田 智里・小林 横雄

(糖尿病センター) 大森 安恵

近年、insulin-like growth factor I の生体内での分布と他の成長ホルモンの関連について、注目を集めている。今度、我々は人体剖検例を用い、ヒト内分泌腺組織におけるIGF-Iの局在を免疫学的に検討し、またヒト膵臓の手術材料を用い、プロテインA-コロイド

金法(PAG法)で、膵島β細胞内におけるIGF-Iの分布を観察した。

その結果は、1)下垂体の好酸性細胞と甲状腺濾胞上皮細胞の一部には陽性構造が認められたが、睪丸の間細胞と精上皮細胞における局在は弱く、卵巣においては陰性であった。2)副腎皮質の束状帯、網状帯と上皮小体の酸好性細胞に強い染色性の局在を認め、膵島には明瞭な染色性を示した。連続切片で、IGF-Iとinsulin, glucagon, somatostatinの免疫染色ではIGF-Iは主にβ細胞に陽性構造を認めた。22週胎児の膵臓にも、膵島に一致して陽性構造が認められた。3)免疫電顕で、β細胞内のIGF-Iは細胞質の分泌顆粒に多数存在し、また金コロイド粒子は細胞核と基質にも散見できた。

6. Distal ureteral atresia を伴った重複腎盂尿管の1例

(腎臓病総合医療センター泌尿器科)

内田 靖子・山崎雄一郎・小山 一郎・
中村 道朗・家後 理枝・加藤 尚子・
中沢 速和・東間 紘

Distal ureteral atresia は尿管末端が盲端に終わり、膀胱との交通を欠くため、尿の排泄が障害され水腎尿管を来す比較的稀な先天性泌尿器疾患であり、今回我々は本症と診断された1例を経験した。症例は57歳の男性で腹部エコーにて右腹部腫瘤を指摘された。

同疾患の本邦での報告は文献上30例あり本症例はその31例目に当たる。

7. 巣状糸球体硬化症を合併した膜性腎症

(第4内科)

若井 幸子・松村 治・湯村 和子・
佐中 孜・二瓶 宏・杉野 信博

〔目的〕膜性腎症(MGN)を呈し巣状糸球体硬化(FGS)の所見を合併した症例の検討を行った。

〔方法〕膜性腎症120例中27例に巣状糸球体硬化の所見を認め、これらをMGN+FGS群とし、年齢、性、stageをmatchingさせた25例をcontrol群とした。両群間の腎組織所見、臨床検査所見、予後の比較を行った。

〔結果〕MGN+FGS群では、糸球体内にfoam cell, protein dropletsを認めたが、control群には認めなかった。また、糸球体面積はcontrol群に比し有意(p<0.001)に拡大し、間質尿管の変化も有意(p<0.001)に高度であった。MGN+FGS群では、血尿(61% vs 22%)、高血圧(63% vs 37.5%)がcontrol群に比し